

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2020.3) 令和元年度:11-13.

早産児の母親が産科病棟入院中に経管栄養を実施することへの認識 ～
アンケート調査より～

西出 藍, 藤本 美有

早産児の母親が産科病棟入院中に経管栄養を実施することへの認識 ～アンケート調査より～

旭川医科大学病院 NICUナースステーション ○西出藍 藤本美有

[目的]

A病院NICUでは退院後に経管栄養を必要としない子どもに対しても、育児の一環として母親が経管栄養を実施している。母親の搾乳に対するモチベーションを高め、子どもの成長を実感できるような関わりにつなげるために、母親の経管栄養に対する認識を明らかにすることを目的に研究を行った。

[対象と方法]

2014年1月～2018年5月に在胎34週未満で出生し、2018年5月末までにNICUから退院・転棟した子どもの母親68名。経管栄養を実施した際の気持ち等について、無記名自記式アンケート用紙を郵送で配布し、回収した。得られた結果は単純集計し、経管栄養に対する感想は意味内容をまとめカテゴリー化した。

[結果]

質問紙の回収は37名。有効回答は34名。経管栄養を実施時の気持ちは子どもの生命力を感じた、搾乳のモチベーションが高まったと9割程度の母親が回答した。一方で、怖い、ためらう気持ちを感じていた。経管栄養に対する母親の感想は51のコードが得られ、12のカテゴリーに分類した。自分の体調や気持ちが整っていない、経管栄養を通してかわいそう・申し訳ない気持ちを抱く母親もいた。

[考察]

経管栄養の実施は母親の喜びや母親役割に繋がり、良い経験になったと考える。また、母親の体調や気持ちが十分に整わないまま面会となる場合もあり、経管栄養を行っている子どもの姿をみることは、母親が抱いていた授乳のイメージとは異なるため衝撃を受け、子どもに対して申し訳なさを抱くことに繋がったと考える。

[結論]

1. 母親が経管栄養を実施することは、育児の喜びや母親役割を担うこと、搾乳のモチベーションを上げることに繋がる。
2. 母親の経管栄養の実施は、母親としての自信の喪失や恐怖心を強めることも懸念されるため、看護師は母親の思いに寄り添った関わりが必要である。

早産児の母親が産科病棟入院中に 経管栄養を実施することへの認識 ～アンケート調査より～

旭川医科大学病院NICU 西出藍・藤本美有

はじめに

- ・ A病院NICUでは退院後に経管栄養を必要としない子どもに対しても、育児の一環として母親が経管栄養を実施している。
- ・ 先行研究で母親が経管栄養を実施することは育児手技の早期獲得や愛着形成の促進に効果的であることが明らかになっている。
- ・ 母親が経管栄養を実施することに対してどのような思いや考えを抱いているのかは明らかではない。

目的

母親の搾乳に対するモチベーションを高め、子どもの成長を実感できるような関わりにつなげるために、母親の経管栄養に対する認識を明らかにする。

倫理的配慮

研究者が所属する機関の倫理委員会の承認を得た。

研究方法

1) 対象

2014年1月～2018年5月までの間に在胎34週未満で出生し、2018年5月末までにNICUから退院・転棟した子どもの母親68名。

2) 方法

独自に作成した無記名自記式質問紙を郵送で配布、回収した。

3) 調査項目

- ①基本情報（在胎週数、出生体重等）
- ②経管栄養実施の状況
- ③面会時に実施できた育児（5段階評価）
- ④面会時に見た子どもの反応やサイン（5段階評価）
- ⑤経管栄養を実施した際の気持ち（5段階評価）
- ⑥面会に来ることをためらった理由（自由記載）
- ⑦経管栄養に対する感想（自由記載）

4) 分析方法

得られた結果は単純集計し、自由記載の項目は意味内容を

結果

1. 質問紙の回収

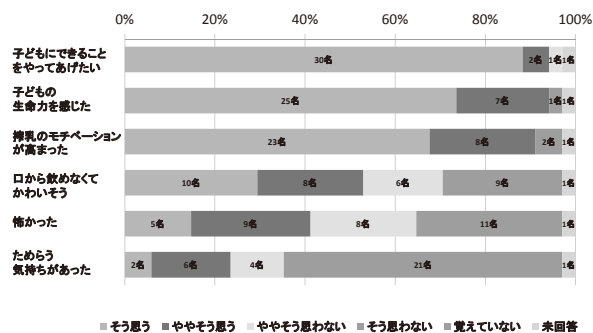
回収率:37名(54.4%) 有効回答率:34名(91.8%)

2. 対象者の概要

- ①子どもの在胎週数 平均29.5±2.7週
- ②子どもの出生時体重
1000g未満:11名(32.4%) 1000g～1499g:10名(29.4%)
1500～1999g:10名(29.4%) 2000g以上:3名(8.8%)
- ③経管栄養の実施経験がある母親:33名(97.1%)
- ④経験のない母親:1名(2.9%)

- ・ 多くの母親に経管栄養の実施経験があったが、経管栄養の時間に合わせて面会に来ていた母親は23名(67.6%)であった。
- ・ NICUへの面会自体をためらう母親が12名(35.3%)いた。
- ・ 経管栄養の感想の自由記載欄に何らかの記述があったものは20件(58.8%)で記載内容の総数84記述のうち、経管栄養に関する記述は40記述(47.6%)であった。

経管栄養を実施した時の気持ち (N=34)



経管栄養に対する母親の感想は、12のカテゴリーと51のコードに分類できた。

カテゴリー	コード
子どもとのコミュニケーション	1つ1つできることをやってあげられることで身近に感じた/経管栄養を通してわが子とのコミュニケーションを図ることができた
喜び	経管栄養は飲んでくれているのが目で見えてわかり嬉しかった/経管栄養でも母乳を飲ませてあげることができたことが喜びだった
思い出になる良い経験	振り返るととても貴重な体験だった/母親としての役割を担うことができて感謝している
かわいそう・申し訳ない気持ちになる	申し訳ない気持ちがある/はじめはかわいそうだった/小さい子どもに行うことに抵抗があった
実施の必要性に疑問を感じた	経験栄養での母乳で愛着が深まると説明を受けたが、疑問を感じた/退院後に必要ではないのにやる必要があるのか
自分の体調や気持ちが整っていない	自分の体調が悪くて、あまり覚えていない/自分に余裕がない

考察



- ・経管栄養の実施を通して“子どもにできることをやってあげたい”“子どもの生命力を感じた”“搾乳に対するモチベーションが高まった”
- ・経管栄養の実施は【喜び】【子どもとのコミュニケーション】【思い出になる良い経験】となった。

➡経管栄養の実施を通して、母親としての役割を担うことができ、母親にとっての良い経験に繋がっていた。



- ・不安、自責の念、母親自身の体調不良で面会をためらう母親もいた。
- ・経管栄養の実施を通して【自分の体調や気持ちが整っていない】【かわいそう・申し訳ない気持ちになる】があった。

➡母親の受け入れの状況や体調、経管栄養に対する思いを把握しながら勧めることが必要。

➡母親が抱いていた授乳のイメージと異なることで、衝撃や申し訳なさに繋がっている。

結論

1. 母親が経管栄養を実施することは、育児の喜びや母親役割を担うこと、搾乳のモチベーションを上げることに繋がる。
2. 母親の経管栄養の実施は、母親としての自信の喪失や恐怖心を強めることも懸念されるため、看護師は母親の思いに寄り添った関わりが必要である。